

第2回(2009年10月14日)「援助は経済成長に有効か？」

Easterly, William., Ross Levine, David Roodman (2004)

“Aid, Policies, and Growth: Comment”.

American Economic Review, 94(3)

有本 寛

2009年10月8日

1. 背景

- Burnside and Dollar (2000)は、「援助は、良い財政、金融、貿易政策を実践している発展途上国では経済成長に正の影響をもたらすものの、悪い政策の下では効果が小さい」と主張した。
- この知見は、(1) 援助は成長に効果的であり、(2) 良い政策を実践している国に選択的に援助を行うべき、という重要な政策的含意を持ち、実際に援助供与国や国際機関の援助政策に大きな変化をもたらした。
- しかし、これに対して多くの研究が説明変数を追加したり、推計式を変えたりするなどして、援助の成長促進効果の有無を追試しているものの、論争に決着はついていない。

2. 課題と方法

- 論文の課題は、「援助が成長促進効果を持ち、かつそれは良い政策の下でのみ発揮される」というBDの命題の頑健性を追試することである。
- 仮説は明示的な設定されていない。焦点はBDの命題の追試である。よって、仮説は「援助が成長促進効果を持ち、かつそれは良い政策の下でのみ発揮される」というBDの命題である。
- 仮説のポイントは、援助の総額が重要なのではなく、それが適切な政策の下で活用されるときに限り有効であるという点である。よって、「政策の善し悪し」によって総援助額を「実質化」した「実質援助額」を説明変数とする。仮説の検証戦略は、「良い政策」で実質化された「実質援助額」のバラツキで、経済成長率のバラツキを説明すること。「良い政策」で援助総額を実質化するために、援助総額に政策の質を乗ずる ($Aid \times Policy$: ここで Aid は援助額, $Policy$ は政策の質を表す指数)。仮説検証は、「経済成長率を被説明変数とする成長回帰式の推定結果における $Aid \times Policy$ の交差項の係数が正で有意である」ことを確かめることによって行う。この交差項が正で有意であれば、「良い政策の下では援助が経済成長を促進する」ことが示唆される。
- 方法はBDに従う。観察データは各国の各年の観察をプールしたものである。経済成長率を Aid (援助総額), $Aid \times Policy$ (政策で実質化した実質援助額), その他の説明変数で OLS 回帰する標準的な成長回帰である。
- まず、BD とまったく同じデータ、説明変数、推計式を使って追試し、BD の結果を再現する。次いで、データの期間とサンプルに含まれる国だけを増やすことでBDの結果の頑健性を確かめる(他の追試と異なるのは、できるだけBDと同じ手法を使うこと)。

3. 結果

- 主要な結果である Table 1 は、一人当たり GDP 成長率を被説明変数とする OLS 推計の結果である。説明変数は、援助額、多民族民族分散度、制度の質、地域ダミーなど。

- 新しいデータセットによって、BD の結果が再現された (Table 1(1)(3)). そこでは、Aid*Policy の係数が正で有意であり、仮説通りの結果である。
- しかし、新しいデータセットによって、サンプルに含まれる国と計測期間を増やすと、Aid*Policy の係数は逆に負で有意でなくなった (Table 1(2)(4)). さまざまなサンプルや計測期間について 20 通りの推計を行ったところ、Aid*Policy が正で有意となったのはひとつだけだった (Table 2).
- よって、この論文は、援助が良い政策の下で経済成長を促進するという結論に深刻な疑問を呈するといえる。

4. コメント

- この論文は、政治的にも大変影響力を持った論文を、極めて単純かつ効果的な方法で批判した、ある意味痛快な論文である。批判の方法が、BD の枠組みをそのままに国と計測期間だけを増やすという単純な方法であるがゆえに、批判としての説得力が非常に高い。
- しかし逆に、BD の批判以外に、援助と経済成長の関係について何らかの（結果が頑健でないという以外に）新たな知見を与えるものではない。もっとも、この批判は、この論文の目的が BD の結果の脆弱性を示すことのみであり、援助と成長を新たな視角から分析することを意図しているわけではないので、的外れといえは的外れである。
- この論文から導かれる教訓は、実証研究の結果は必ずしも頑健でなく、場合によっては恣意的になり得るということである。この論文で示されたように、データのサンプルや期間を少し変えるだけでも結果が大きく変わることがあるし、変数の定義や、推計に含まれる変数を変えれば、なおさらである。よって、研究者は実証結果の頑健性を丁寧にチェックしなければならないし、研究の結果を受け取る側も結果の脆弱性や不完全性に留意する姿勢が必要である。

5. 関連論文

- Burnside, Craig and Dollar, David (2000) “Aid, Policies, and Growth”, American Economic Review, 90(4), pp.847-68.